



四万十町

町内 **ふらへり** 散策

弘見

ひろみ

窪

川の街中から見付を過ぎ東又地区へ。B & G 海洋センターや農業高等学校を左手に見ながら県道325号を東へ。郵便局や駐在所などがある黒石の集落を過ぎると、県道は緩やかに左に(北へ)向かう。ほどなく飯ノ川(東又川)を渡る小さな橋が架かる。そこから北側に広がる実のどかまで日当り抜群の集落が弘見地区である。地区に入ったあたりで車を降り、東、南、西へと目をやる。遮るものが何もなく、東又地区の風景を楽しむ場所としては最もおすすめのスポットである。田園風景がとても美しい。

古くから、弘見地区は志和へ向かう道中の最後の休息地であった。志和城のお姫様は、嫁ぎ先である西原から実家である志和へ赴く際には、必ずここで最後の休息を取ったという。お姫様もこの場所で東又の景色を楽しんだに違いない。地区の氏神様として天御中主神(アメノミナカヌシノカミ)を祀る大元神社が天神山という丘に鎮座する。この神社の鳥居前のちよつとした広場が実に良い。地区の方が作ったと思われるベンチが可愛らしい。お天気の良い日などは、ここでのんびりしたくなる。

さて、弘見という集落の歴史はかなり古いと思われるが、確かな文献が残っているのは最も古いもので戦国期の地検帳である。この地検帳にはす

で「ヒロミノ村」とある。このヒロミノ村は、その後「張木村」ともいった。ヒロミノ村が張木村になり、その後また弘見村と変遷していった経緯は、記録が残っていないのでわからない。

ところでこの弘見村に、戦国期に地頭から豪族になり、江戸期にはこの地区の大地主となった家があったのだが、この家の当主が剣術道場を開いていた。

当時、窪川近辺で剣術道場というのはここだけであったようである。幕末、この道場で修行を積み、武術を学んでいた与津地屋清次という人物がいた。清次の職業は魚の行商であったが、勤王の志士を目指し、妻子を捨て脱藩。長州藩に身を投じたが、混乱の世に翻弄され、非業の最後を遂げたという。荒れる世の中とは無縁に見えるこのどかな集落にも、幕末の「変革の空気」は届いていたのであろう。

弘見地区には、現在49世帯、103人が暮らしている。



神社前は憩いの空間。鳥居の向こうは「トトロの森」として親しまれているらしい

町のうごき	(2月29日)		前月比	出生 死亡 転入 転出				適正值(mg/l) 3月15日	
	男	女		男	女	計	計	リン酸	硝酸
	8,554	9,524	-5	4	15	19	13	≤ 5.0	測定範囲以下
			-15	3	19	20	19	≤ 0.5	0.418
	18,078		-20	7	34	39	32	≤ 5.0	測定範囲以下
	世帯数	8,618	1	(2月中の届出)				≤ 1.0	0.15
	窪川地域	12,641人		大正地域	2,595人	十和地域	2,842人	≤ 10.0	測定範囲以下

四万十川の
水質状況

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部